

入選

私が出会った小さな親切

千葉県 法田中学校 3年 渡邊 芽衣

私が見た「小さな親切」について、書きたいと思います。世の中には、たくさんの「小さな親切」があると思います。お年寄りに席をゆずる、からだの不自由な方の荷物を持ってあげる、落ちているごみを捨てる等、日常の中でたくさんの「小さな親切」に出会います。

私が出会った「小さな親切」は、食事にいったファミリーレストランでのできごとです。最近のファミリーレストランには、ドリンクバーという、自分で好きな飲み物を取ることができるシステムがあります。そのドリンクバーの前で、小さな男の子がボタンを眺めていました。どれにするのか迷っているのかなと最初は思いましたが、上の方のボタンを押すにはその子の身長では難しいので、もしかしたら届かないのではないかと思い、その子のところへ行こうと思いました。

ところが、私が行く前に先に高校生くらいの少し怖そうな男性が、その子の後ろに並びました。私は、(大丈夫かな? 怒られちゃったりしないかな?) と少し心配になり、急いで向かおうとしました。そのとき、その男性が小さな男の子に声をかけました。「どれが欲しいの?」と。

しかし、男の子は答えません。男性は順番にボタンを指差し、「これ?」「これ?」と聞きます。それでもその子は強く首を横に振ります。それを見ていた私も、(えっ?) と思ってしまいました。男性も全部指差し終わったあと、少し悩んだように首をかしげていましたが、思いついたようにその小さな子を抱き上げ、ボタンの押せる位置に男の子を連れていきました。

すると男の子は、すぐにアイスコーヒーのボタンを押し、すごく笑顔になり、とてもうれしそうにそのコップを持って、自分の席に戻っていきました。そして何もなかったかのように、男性は自分の飲み物を取り、去っていったのですが、戻った男の子の席を見ると、そこには車椅子に乗ったお母さんらしき人がいました。

お母さんは抱き上げてくれた男性の方を見て、軽くおじぎをしていました。体が不自由なお母さんのために、どうしても自分で飲み物を用意して持っていきたかった男の子の気持ち。ここにも男の子の「小さな親切」があって、その男の子にボタンを押させてあげた男性にも「小さな親切」があったのだと私は思いました。

もし私が、先に男性より早く男の子のところに着いていたとしても、抱き上げてボタンを押させてあげようと思えたでしょうか。きっとなんども聞いて、私がボタンを押すか、もしくは男の子が飲み物を届けることをあきらめてしまったかもしれない。私ではなく、あの男性だったからこそ起きた二つの「小さな親切」だったのかもしれない。

ボタンを押してしまうことはとても簡単なことだけれど、男の子の「自分がお母さんにしてあげたい」という大切な気持ちに気づけるようになることが、大事なことなのだと思います。最後に、男性に対して少し怖そうなんて思ってしまったってごめんなさい、という反省もあった私でした。